

ワークショップ「札幌」報告

- 1 とき 2011年6月25日(土)13時~17時
- 2 ところ 北海道札幌市立啓明中学校図書室
- 3 内容概略

① 本年度2回目の札幌での経済教育ワークショップであった。

参加者は、27名、ネットワークからは、篠原代表、野間敏克先生、奥田修一郎先生、新井が参加。また、北海道教育大学の濱地秀行先生が助言者として参加された。

内容は、まず、開会挨拶で、札幌市立開成高等学校の川瀬雅之先生から、今回のワークショップは、「ステップ」として夏の「ジャンプ」の中間的位置づけで行うとの趣旨説明がされた。

② 野間敏克先生からは、「中学校公民教科書を読み解く」という基調講演があった。野間先生は、札幌地区で使われている東京書籍の公民教科書を読んだ感想として、網羅的だが、全体としてストーリーが無いことを上げ、教科書を使ってゆく上で心がけたいことを5点あげられた。それは、①悪い課題を教える前に良いことを教えたい。②二分法や、決め付けた対立構図はやめる。③とはいえ、隠されがちな現実を直視する。④教科書の話が、身近な話であることを知らせる。⑤いろいろな話がつながっていることを意識する。である。

その上で、経済学の考え方の基本を示し、消費者と政府、企業と政府、金融問題と政府、労働問題と政府、財政問題の5つのテーマに関して見所や勘所、授業で役立つデータを紹介された。特に、ご専門である金融に関しては、直接金融と間接金融の理解に関して、銀行や証券の役割の違いを銀行は加工業、証券は流通業という比喩で紹介されるなど興味深い指摘をされた。

③ 篠原代表からは、「企業シミュレーション」教材の紹介がされた。身近なところからという点と、経済全体の役割という点からは、家計からよりは企業から授業をはじめることが仕組みを理解するポイントになるとの提案がされた。

④ 授業提案では、大阪狭山市立南中学校の奥田修一郎先生から、「どの子ども意欲的に学べる経済学習を目指して」という発表がされた。奥田先生は、関西ネタ研の活動を紹介されるなかで、ご自身の開発されたネタや実践例と、関西ネタ研の指導者のひとりである川原和之先生の開発されたネタの例を多数紹介されながら、実際の授業をどう構成してゆくのかを、参加の先生方を巻き込んで話を進められた。

奥田先生の授業の特色は、生徒を怒らないでいかに授業に顔を向けさせるか、そのなかで経済に関心を持たせるためのノウハウが詰め込まれていた。一つあげると、地元の回転すしチェーンの本部を取材して作った教材がある。独自の調査を通してつくりあげられた教材を通して、生徒の関心と意欲を高める実践にそれが現れている。奥田実践の詳細は、ネットワークの他のワークショップや、関係の学会でも紹介されてゆくであろう。その日を期待したい。

⑤ 最後のセッションでは、参加の先生方からの疑問と、地元教材作成のアイデアを集めて検討する、討論が行われた。

疑問では、経済の教え方の難しさをいかに突破するかが多く、野間先生、篠原代表、濱地先生などから回等を受けた。教材のヒントでは、わらしべ長者風の最初のネタから広がるようなものはないかということで、検討が進められた。方法として、先生方から提案された意見や感想をKJ法風に整理した。そのなかで、生徒に紹介する地元企業は何かをあげてネタを探すなど、参加の先生方の意見、創意をいかす方法やヒントがまとめられていった。

⑥ 最後に、このワークショップでの成果を参考材料に、8月6日に予定されている、夏のワークショップでの授業案づくりを目指すことが確認され、会を終了した。

(文責 新井)